

## 関東地方の都市緑地のツミの繁殖個体数の変遷

植田睦之・平野敏明 (NPO 法人バードリサーチ)

ツミは従来、山地で繁殖する小型の猛禽類と考えられてきたが、1980年代にはいると都市緑地での繁殖が各地で報告されはじめた。われわれは東京都中西部および栃木県宇都宮市で1980年代後半よりツミの繁殖状況をモニタリングしている。その結果をもとに、関東地方の都市緑地でのツミの繁殖個体数の変遷とその原因について明らかにした。

東京では5×5kmの調査区で1987年から現在まで繁殖状況をモニタリングしている。調査を開始した当初の1987-1990年の5か所から、1991-1994年の12か所へと最初はツミの分布は広がった。ところが、その後、繁殖つがい数は減り始め、1995年から1998年は7か所、2003年以降は6所で繁殖したものの、うまくヒナを巣立たせた場所は1か所のみだった(図1)。

宇都宮では43.5km<sup>2</sup>の調査区で1989年から調査を行なっているが、1991-1993年に8~9つがいと繁殖地は最も多くなり、その後は減少し、年によるばらつきはあるものの、5~6つがい程度となった。2003年以降は5~7か所で営巣したものの、ヒナを巣立たせた場所は1~2か所であった。多くは抱卵初期までに失敗(おそらく放棄)した。

このような繁殖つがい数の減少に影響している要因としてもっとも大きなものとしてはハシブトガラスの増加が考えられた。東京で1990年代前半に繁殖していて、2000年には繁殖していなかったツミの繁殖地では、ハシブトガラスの個体数が有意に増加しており、ツミが繁殖していた場所ではハシブトガラスは増加していなかった。宇都宮でも1990年代中期以降にハシブトガラスが増加し、カラス類(特にハシブトガラス)の行動圏が緑地の全域を占めている場合にはツミは繁殖することができず、行動圏に隙間があった場合には、そこでツミが繁殖していた。

したがって、東京、宇都宮ともに、ハシブトガラスの増加によりツミが繁殖することが難しくなり、そのためにツミの繁殖個体数が減少したものと考えられる。

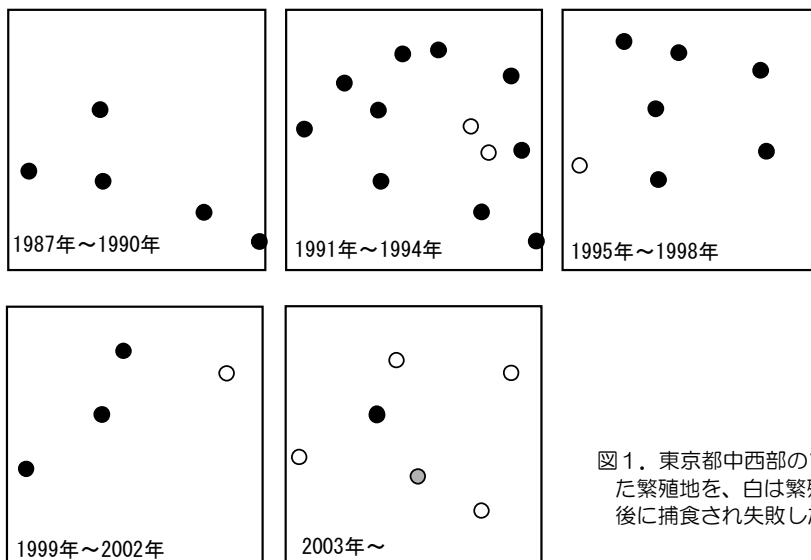


図1. 東京都中西部のツミの繁殖状況。黒い丸は繁殖に成功した繁殖地を、白は繁殖に失敗した繁殖地を、灰色は巣立ち直後に捕食され失敗した繁殖地を示す。